

歯学部

I	研究水準	研究 3-2
II	質の向上度	研究 3-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、研究論文は総数 1,015 編で、教員一名当たり平成 16 年度から平成 19 年度では総計 7.3 件、年平均では 1.8 件を公表している。提出された論文 35 件のうち重点項目に該当する論文は、難治性口腔疾患研究: 9 件、包括的口腔科学研究 2 件、口腔腫瘍制御研究 3 件、唾液腺再生研究 3 件、硬組織再生研究 5 件の計 22 件である。学会発表数は海外で総数 119 件、年平均約 30 件、教員一名当たり年平均約 0.2 件である。研究資金の獲得状況については、外部資金取得状況は、平成 16 年度総額約 15,000 万円(教員一名当たり年平均約 108 万円)から平成 19 年度約 2 億 4,000 万円(教員一名当たり約 176 万円)へと増加していることは、優れた成果である。

以上の点について、歯学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、歯学部が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、インパクトファクター（IF）5 以上の研究論文編数が 35 件で総論文数の 3.4%となっている、さらに IF10 以上の卓越した(SS)レベルの研究が 6 件であり、研究の質の高さを示している。T 細胞の活性化機構の研究で平成 19 年度文部科学省若手科学者賞を受賞した。また、社会・経済・文化的意義の観点からも優れた

業績も認められ、研究活動の成果が社会的にも貢献していることを示していることは、優れた成果である。

以上の点について、歯学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、歯学部が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 2 件、「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が 6 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。